

地域の底力——山口県長門市

# 行政と市民、 それぞれの危機感が まちを動かし始めた 山口県長門市

広がる美しい森と海、恵まれた食、温泉。  
山口県長門市は自然の恩恵のもと、  
これまで日常の営みを重ねてきた。  
その豊かさの陰で進行していた  
時代の流れを目の当たりにし、  
行政、民間の双方から風が吹き始めた。

取材・文 山内史子  
写真 野瀬勝一

山口県長門市の「北長門海岸国定公園」内、標高333メートルの高台に草原が広がり、日本海の美しい景色が望める「千畳敷」。長門市内の海岸線の全てが国定公園に含まれており、風光明媚な眺めが続く。



## 流れる時代を受け止め 動きだした行政と市民

山口県北西部、日本海に面して東西に広がる長門市は、人口約三万一〇〇〇人を有する。一帯の歴史は、七世紀後半に成立した長門国が礎。北長門海岸国定公園に指定された沿岸部は自然が織りなす美しい景色が続き、油谷湾、深川湾、仙崎湾と、山陰地方では数少ない湾が三カ所にあることから漁港として、その昔は北前船（まげぶね）（注1）

の寄港地としても賑わってきた。

立地を活かした漁業、市面積の約七割を占める森を舞台とする林業、米づくりを中心とした農業、これら第一次産業が経済の要。加えて、古くから続く温泉郷が五地域あるなど、観光地としても長い歴史を刻んできた。しかしながら、近年は人口の減少や住民の高齢化が進んでいる。

東京での大手銀行勤務を経た後に帰郷し、二〇一七年に長門市議会議員、二〇一九年からは市長を

務める江原達也氏は、地域についてこう語る。

「長門市は豊かな自然とともにおいしい食に恵まれていますが、それが毎日の暮らしの中にある普通のことだったため、多くの人は外に出てはじめて魅力に気付く。人の気質はおおらかでやさしい一方、将来への危機感は薄かったと思います。東京でも地元紙を購読して故郷に思いを寄せていましたが、帰るたびに過疎化が進んでいるのが気がかりでした」

江原氏が市長就任後に真っ先に手掛けたのは、高齢者が通院や買い物の際に頼れるデマンド交通（注2）の導入だ。自宅から市内の主要な場所への移動など利用者のニーズに応じて稼働している。また、量販店の協力を得て郊外へと赴く移動販売車のサービスも始まった。若い世代に向けては、働く場所の確保に重きを



豊かな海の恵みを活かし、室町時代から続く製塩法「天地返し」の技法を用いる油谷地区の「百姓庵」では、海水に近いミネラルバランスの塩がつけられている。



置いていると江原氏は話す。

「人口減少対策で肝心なのは、いかに子育て世代に選ばれるまちをつくっていくか。そのためには魅力的な働く場所の選択肢を増やす必要がありますが、市の規模を考えれば、外の方々の力を借りることも大切であると思っています」

例えば農業では、耕作放棄地を活用し有機農法を手掛ける大手企業を誘致。有機農法は土づくりを要するが、耕作放棄地なら転用が容易という発想だ。二〇二三年三月には中国地方初の「オーガニックビレッジ」を宣言し、今後の姿勢を明確にした。効率的なスマート農業などを含め、後継者の背中を押す取り組みも展開されている。

「市民の小さな声もきちんと拾い、形として残るものにとられず、デマンド交通のようなソフト面の充実を進めていきたい」と話す、長門市長の江原達也氏。背景は、多くを森の緑が占める市域の航空写真。



（注1）江戸時代から明治時代に、大阪から下関を経て北海道に至る「西廻り」航路に従事した日本海側に船籍を持つ海運船。  
（注2）あらかじめ決まった時間帯に決まった停留所を回るのでなく、予約を入れて指定された時間に指定された場所へ送迎する交通サービス。



江戸時代後期に、長州藩の藩政改革を指導した村田清風旧宅「三隅山荘」。隣接する「村田清風記念館」では、清風やその遺志を引き継いだ周布政之助の功績が展示されている。



漁業ではもともと、トラフグをはじめとした養殖業が盛んだったが、アワビの中間育成、赤ウニの養殖などあらたな事業も手掛けられるようになった。林業では

環境保全を考えた採算を得る、持続可能な「自伐型林業（注3）」が広がりつつある。

また各地で同時多発的に、市民がまちを思いながら動き始めているのが興味深い。

「例えば商店街や各地域の活性化は、行政ではなく民間がリードすることが大事だと思っています。行政は環境整備等でサポートに注力する。そういう流れが、長門市のあちらこちらで生まれています」

## 公と民が総力を尽くし 生まれ変わった温泉郷

組織作りと地域の活性化において全国から注目されるのが、室町時代から続く長門湯本温泉だ。山口県最古の温泉郷として栄え、昭

和五十八年（一九八三）には年間三九万人の宿泊客を数えたが、その後は右肩下がりを続け、平成の終わりには半減した。

「宴会やカラオケなど団体客に向けた楽しみが、昭和の日本の温泉旅館の主役。しかしながら旅のスタイルが徐々に団体から個人へ、周遊から滞在型へと変わる中、長門湯本温泉はニーズに対応できていませんでした」

そう振り返るのは、DMO（注4）、ローカルデベロッパ、地域振興の機能を掲げて二〇二〇年に設立された「長門湯本温泉まち株式会社」のエリアマネージャー・

「地域の多様性や地元の人が大切に思うことに寄り添うような旅の在り方を伝えたい」と話す、長門湯本温泉まち（株）エリアマネージャーの木村隼斗氏。



長門湯本温泉を流れる音信川には複数の川床が設けられ、散策の際の憩いの場になっている。



木村隼斗氏だ。木村氏は二〇一五年、地方創生人材支援制度で経済産業省から長門市に出向して以来、地域の経済観光事業に広く関わってきた。

そんな長門湯本温泉は二〇一四年、老舗旅館が廃業したことをきっかけに転機を迎えた。市が買い取り解体を進めた跡地に「星野リゾート」の施設を誘致する敷地単位の再生だけでなく、温泉街全体の「面的再生」を目指す「長門湯本観光まちづくり計画」を二〇一六年に策定。人気温泉地ランキングトップ10入りを目指す「長門湯本みらいプロジェクト」がスタートした。

「皆が危機感を共有していましたが、代わりとなる施設の誘致だけでは点の再生でしかありません。関係者が意見交換を重ね、公共財である温泉街にてこ入れ

石屋真梁禪師が一四一〇年に開創した大聖寺は、かつて「西の高野」といわれたほど隆盛を誇った。第三世住職の定庵禪師が住吉の大明神の導きで長門湯本温泉の恩湯を発見したといわれ、現在も湯源は寺が所有する。



をして宿泊客の満足度を上げる、面的な整備が必要だという考えに至りました」

景観や文化体験、回遊性などがあたらしい温泉街の要素として掲げられ、後に「長門モデル」ともいわれるプロジェクトは進む。

「専門家や行政の担当者、地元若手が課題への具体的な解決策を提案する『デザイン会議』と、市長や旅館組合などの関係団体の重鎮がオープンな形で議論をして意思決定する『推進会議』。その双方が、スピーディーに事業を進めていくためのプロジェクトの柱でした」

ほかにも地域住民とのワークショップや社会実験が何度も開か

（注3）採算性と環境保持を両立するために、森林の経営や管理等を山林保有者が自ら行う林業。

（注4）Destination Management Organization（デスティネーション・マネジメント・オーガニゼーション）の頭文字の略。観光地域づくり法人。





外湯が楽しめる恩湯は源泉が岩板から湧き出る場所に立ち、浴槽の足元からも直接温泉が湧き出る、全国でも希少なつくり。

数百本の竹林が両脇を彩る石段は夜間にライトアップされ、温泉街のそぞろ歩きに風情をもたらす。



れ、温泉街の散策に関わる道路や川床といった公共の場所は市や山口県との調整が重ねられる。店舗など各所のリノベーションは、地域住民だけではなく学生たちも参加した。周囲を広く巻き込んだ動きを、木村氏は「公民総力戦」と表現する。

「関係者の思いが深まり、新規の店舗や事業が生まれるケースも多々見られました。各旅館の皆さんが自らリスクを負って投資するなど、新しいチャレンジができる土壌があることに惹かれた自分も、大きく巻き込まれたひとりです」

そう笑う木村氏は、二〇一九年に経済産業省を退職して現職に至る。

竹林が囲む階段や川床の飛び石といった景観が整った二〇二〇年、星野リゾートの新規温泉ホテルがオープン。さらには、老朽化していた外湯「恩湯」が、モダンに生まれ変わった。コロナ禍の最中ではあったが、関係者の展望は明る

(か) 環境を守る、(き) 木の文化を伝える、(く) 暮らしに木を取り入れる、(け) 経済を活性化させる、(こ) 子どもの心を豊かにする。これら5項目を木育の「かきくけこ」として、岩本美枝氏が理事長を務める「NPO 法人 人と木」は活動の輪を広げ続ける。岩本氏が手をかけているのは、木製の観光船を再生させた小さなキッズクルーズ船「弁天」。



かったと木村氏は話す。

「皆が見据えているのは、二〇年、三〇年先。未曾有の事態であっても永遠に続くわけではないと、前向きだったのが印象に残っています」

より多くの若い世代に関わり始めた現在も、「みらい」に向けたプロジェクトは歩みが続ける。

### 多くの人の心に響く 森が支える木育活動

長門市では二〇一七年に、行政と民間が連携して森林資源を活かし、木育を推進する「ウッドスタート」を宣言。その流れから二〇一八年に誕生した「長門おもち美術館」も、話題を集める存在だ。木製のおもちの展示販売



に加え、地元の木材をふんだんに使った広々とした空間が設けられ、子どもたちは木のやさしい質感にふれながら遊ぶことができ。美術館は仙崎湾に面し、湾を巡る「キッズクルーズ船『弁天』」も注目の的だ。

運営を担うのは、二〇一六年から木育を進めてきた「NPO 法人 人と木」。理事長の岩本美枝氏に背景を伺った。

「裏山に行ったり、海に潜ったりと、長門の子どもにとって昔は普通だった遊びが今は容易にはできませんから、機会をつくる必要があると考えようになりました。ただ木を切るだけでも、経験のない子どもにとっては面白いんです。さらには美術館を木育の拠

点として、地域活性化につながるのも私たちの目的の一つです」

森林散策や伐採の見学、専門家の力を借りたおもちの製作といった体験プログラムの展開など、木育の場は美術館の外にも及ぶ。なおかつ、木育の恵み

は子どもだけではなく、美術館でのおもちの遊び方を伝えるボランティアスタッフ「おもち学芸員」など高齢者の心にも温もりをもたらしていた。

「現在一五七名いる学芸員の多くは「おもち美術館」は二〇二三年の時点で全国に一二館あり、長門の施設は二〇一八年に誕生した。ワークショップで子どもたちがつくった、四〇〇個以上の木製の卵で遊べる「木のたまごボール」をはじめ、オリジナルティアーあふれる積み木が多数。木とのふれあいを通じて、木について学ぶことのできる空間。







仙崎地区の海沿いにある道の駅「センザキッチン」には、新鮮な魚介類や特産品の販売、10軒以上の飲食店を目当てに多くの人が訪れる。長門おもちゃ美術館は、このセンザキッチンの敷地内に位置する。



北長門海岸国定公園内、石柱や奇岩が美しい絵を描く「青海島」は、観光遊覧船で巡ることができる。遊覧船の基点でもある仙崎漁港は、下関漁港に次ぐ山口県内2位の漁獲量を誇る。

## 子どもたちが誇れる 焼き鳥のまちを目指す

日本有数の専門組合があるほど

朝びきの鶏肉を使う焼き鳥は、あっさりとしたたれや塩味で調味するのが長門流。市民にとって外食の定番だが、一方で人手不足が

「幼稚園や学校が減り、まちがだんだん寂れていくのを皆が目当たりしています。このままではいけないという思いを、多くの人が抱いているのではないでしょうか」

数え、まちおこしの起爆剤になっていると話すのは、「長門やきとり横丁連絡協議会」会長の青村雅子氏だ。長門湯本温泉の店舗を含めて四軒の飲食店を営む「株式会社Homey」の代表取締役でもある。

「市内に大学がないこともあり、アルバイトのなり手が少ない。若い世代は、利便性の高い大きなまちなちに行ってしまう。次世代につながるためには、子どもたちが焼き鳥をまちの誇りに思える状況を育てていかなければと思っています」  
その一環として小中学校で行われるのが、協議会メンバーの指南のもと、七輪で炭をおこすところ

深刻な課題だと青村氏はいう。

下／鶏肉のおいしさが際立つ長門市の焼き鳥はそのままでもうまいが、地元では一味・七味唐辛子に加えガーリックパウダーを薬味として使う人が多い。



上／写真の「ちくぜん総本店」、長門湯本温泉恩湯の飲食棟「恩湯食」を含め、市内で4軒の飲食店を営む（株）Homey代表取締役の青村雅子氏。青村氏の実家は代々、大寧寺の寺侍として温泉の管理を担ってきた。



上／コロナ禍による売り上げ減少への対策として作成されたマップ「飯友ながと」は、テイクアウトの対応を含めた市内の飲食店情報を網羅している。左／地産地消を目指し炭焼きに取り組み、「やきとりっちゃコール」プロジェクトの皆さん。右から3番目が青村氏。

から始める「焼き鳥教育」だ。さらには、福岡県久留米市をはじめ焼き鳥店の多い地域とも積極的に手を取り合い、全国的な焼き鳥のイベントを長門市で開催すべく尽力してきた。  
「姉妹都市のロシア連邦ソチ市のほかモスクワ、イタリアなど、海外のイベントに参加したこともあ







童謡詩人として知られる金子みすゞは、仙崎地区の出身。長門おもちゃ美術館近くの「金子みすゞ記念館」では、享年26歳で夭逝したその生涯をたどれる。記念館に面するみすゞ通りでは、モザイク画や地元の情景画を見ることが出来る。



「はじめて来たけれど、長門にこんな良い場所があったんだ、とい

地元の食材を使うジェラートは、やがてちまたの話題に。まちなかで営業していたほかのキッチンカー事業者も参加するようになり、週末の棚田は多くの人が憩う場になっている。

活動拠点である、旧文洋小学校。



う方が増えています」

田島氏はデザイン事務所勤務の経験を活かし、制作物を担うなどして保存会の活動にも参画。ジェラートを目当てにこの地を訪れ、棚田の保存に興味を持つ人も見られるという。

### 公と民の双方が重ねる あらたなチャレンジ

二〇二三年二月、長門市では専門学校跡の建物をIT企業のシェアオフィスとして再活用する集積拠点施設整備計画を発表。毛利家直轄の湯治場だった俵山温泉では、若い世代の移住者を中心とした活性化が目玉を集める。

「北前船の寄港地や歴史ある温泉郷として昔から人が行き来してい

たこのまちには、外の人を広く受けとめる心が受け継がれているのかもしれない」

そう話す市長の江原氏によれば、前例や慣習にとらわれがちな役所にも変化が見られるという。

「私は極力、職員と直接コミュニケーションを取る機会をつくるよう努めています。企業人でありましたので、民間の視点からの意見やスピード感と変革意識の大切さを繰り返し語る中で、皆、一生懸命考えながら対応してくれています」

長門市を歩いて印象に残ったのは、まちの未来を思う方々が行政とも連携して立ち上がり、歩みを進める、いくつもの小さな渦ができていく状況だった。皆さんの笑顔を振り返り、地元

出身の詩人、金子みすゞの詩の一節が胸をよぎる。

「みんなちがって、  
みんないい」

それぞれの声ややがて共鳴し、次のステージへとつながる、そんな先々が思い描かれた。



俵山温泉では、行政と民間が連携した地域マネジメント会社の設立構想や、空き家、空き店舗のリニューアルなど、温泉街の活性化に取り組んでいる。



東後畑棚田の中ほどに位置する棚田の花段の広場が、田島氏のジェラートショップのほかキッチンカーが週末に並び、ブランコやハンモックでくつろげるエリア。